

# 精神遅滞児のコミュニケーションに関する事例研究

内 田 芳 夫\*・上国料 里 美\*\*

(2004年10月16日 受理)

## A Case Study of Communication in Mental Retardation

UCHIDA Yoshio・KAMIKOKURYO Satomi

### I はじめに

近年、ことばの発達と障害に関する研究・実践は、従来の語彙や文法といった構造的側面に重点を置いたアプローチから、日常の社会的文脈におけることばの機能的側面を重視するアプローチへと変換しつつある。その一つに語用論的アプローチであるインリアル (INREAL) がある。インリアルは、1974年にコロラド大学の R. Weiss 博士によって開発されたアプローチで、ことばの遅れの問題をコミュニケーションの立場から捉え、コミュニケーションのもう一方の担い手である大人の役割の重要性に注目している。

本研究は、絵本やトランポリン、ボールなど興味を示す遊びはあるものの一人遊びが多く、やり取りが続かない Y 児に対し、人とのやりとりの楽しさを感じさせコミュニケーション意欲を育てるために、インリアル・アプローチ (竹田・里見, 1994) を行った。大人が子どもの意図を読み取り、より反応的にかかわることで子どもと大人相互のコミュニケーションを促そうとするアプローチによって、両者のやり取りがどのように変化し、子どものコミュニケーション意欲や能力がどのように引き出されていったのかを分析し考察した。併せて、3歳から5歳までの3年間における遊びの変化とコミュニケーション行動の変化についても若干の考察を加えて報告する。

### II 方 法

- 1) 対象児：Y 児 (男児), 1996年4月生, 精神遅滞児
- 2) 主 訴：コミュニケーションおよび言語発達の遅れ

---

\*鹿児島大学教育学部障害児教育学科

\*\*鹿児島県立大島養護学校

- 3) 生育歴：出生時体重は3240g，定首は5ヶ月，這行は1歳9ヶ月，つかまり立ちは3歳，歩行は3歳4ヶ月，喃語は5歳1ヶ月。家族構成は父，母，兄，本児の4人である。
- 4) 療育歴：1歳4ヶ月からG県の療育センターで療育を受ける。4歳からK県の療育センターに週3回，通園する。初回来談時は4歳0ヶ月である。
- 5) 発達検査結果

遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表（2001年12月実施，CA 5歳7ヶ月）

- ・移動運動：1歳4ヶ月
- ・手の運動：9ヶ月
- ・基本的習慣：11ヶ月
- ・対人関係：9ヶ月
- ・発語：9ヶ月
- ・言語理解：1歳

6) 分析方法

2000年4月から2001年12月まで，原則として隔週1回（療育は20分），計16回のインリアル・アプローチを行い，Y児と大人のかかわりをVTRに記録し，分析した。また，16回の療育を2期に分け，各期ごとに子どもの様子・大人の様子をマクロ分析し目標を立てた（表1）。分析は，各期においてコミュニケーションの良好な場面として，前期は2000年10月28日，後期は2001年9月9日を抽出し，各50行動のトランスクリプトを作成し，分析を行った。本論では，①子どもと大人両者の変化，②子どもの伝達手段の変化，③ミクロ分析による大人の問題について報告する。さらに，2000年4月から2002年12月までの間に行った療育（計51回）の，①遊びの変化と，②全体的なコミュニケーション行動の変化について分析を試みた（なお，3歳児の様相は母親の記録を参考にした）。

表1 実践経過と目標

	前 期	後 期
子どもの様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「イッー」「ウッー」などの発声がある。</li> <li>・視線が合いにくい。</li> <li>・伝達手段あり （教師の手を取る，教師の手を持っていく，近づく，手を差し出すなど）</li> <li>・一人遊びになりがちである。</li> <li>・歌遊び，トランポリンや抱っこグルグルなどの遊びが好き。</li> <li>・絵本が好きで，見ながら教師の手や指を絵本に持っていく。</li> <li>・アンパンマンの人形やぬいぐるみに興味を示す。</li> </ul> <p>※聞き手効果段階後期～意図的伝達段階</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・笑顔が多く見られ，かかわりを楽しむ場面が見られるようになった。</li> <li>・指さしのような手の動きがある。</li> <li>・発声＋行為などで意図を伝えることが見られるようになった。</li> <li>・教師の動きをまねすることが見られる。</li> </ul> <p>※意図的伝達段階</p>

大人の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの遊びに合わせようとしている。</li> <li>・指さしや身振りを使おうとしている。</li> <li>・子どもの意図が読み取れずやり取りが続かない。</li> <li>・言葉かけが早い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの言葉や行為を確認していない。</li> <li>・子どものテンポにつられて言葉かけが早くなる。</li> <li>・遊びの展開が子どもに合っていない。</li> </ul>
実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人に向かったかかわりを増やし、やり取りを楽しむ。</li> <li>・伝達手段を明確にする。</li> <li>・発声+行為など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発声や指さしなどいろいろな伝達手段を複合して使い、意図を明確に伝えることができる。</li> </ul>
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの意図を読み取り反応的にかかわる。</li> <li>・子どもの言葉や行為を待って、ゆっくり言葉かけする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの言葉や行為を確認するターンを入れる。</li> <li>・ゆっくり言葉かけする。</li> <li>・子どもに合った遊びの展開を工夫する。</li> </ul>

### III 結果と考察

#### 1 子どもと大人両者の変化

##### (1) 相互作用水準の変化（表2，図1）

子どもと大人の相互作用水準を見ると、前期では相互作用不成立状態（水準0）が12.1%であったが、後期では4.3%に減少している。また、相互作用しかけ状態（水準I）の割合も9.1%から4.3%に減少している。そして、相互作用成立状態短パターン（水準II a）が45.5%から30.4%に減少している。反対に、相互作用成立パターン（水準III b）は33.3%から60.9%へとかなり増加している。このことは、表1の実践目標にあるように、大人が子どもの意図を読み取り、反応的にかかわることで、やり取りが成立するようになったと言える。また、相互作用成立状態長パターンの連続度を見ると、前期においては5ターン以上連続したトピックスの数が4だったのに対して、後期においては5ターン以上のトピックスは8と増加しており、やり取りが長く続くようになったことを物語っている。

##### (2) 伝達行動と非伝達行動の割合（図2，図3）

各期の50行動中における子どもの伝達行動と非伝達行動の割合を図2に、また同じく大人の結果を図3に示す。

まず、子どもの伝達行動全体が増加している傾向が見られる。その中でも、開始が前期18%から後期26%へと増加し、反応は前期・後期ともに70%であった。本児が後期に遊びの主導権

表2 相互作用水準カテゴリー

水準		開始	子どもの開始	大人の開始
0	相互作用 不成立状態	a	C ..... A	C ..... A
		b	C - - - - - A	C - - - - - A
		c	C = = = = = A	C = = = = = A
I	相互作用 仕掛け状態	a	C .....> A	C <..... A
II a	相互作用 成立状態 短パターン	a	C .....> A C <..... A	C <..... A C .....> A
		b	C .....> A	C <..... A
		c	C = = = = = A C <..... A	C = = = = = A C <..... A
II b	相互作用 成立状態 長パターン	a	C .....> A C <..... A C <..... A	C <..... A C <..... A C <..... A
		b	C .....> A C <..... A	C <..... A C <..... A
		c	C = = = = = A C <..... A C <..... A	C = = = = = A C <..... A C <..... A

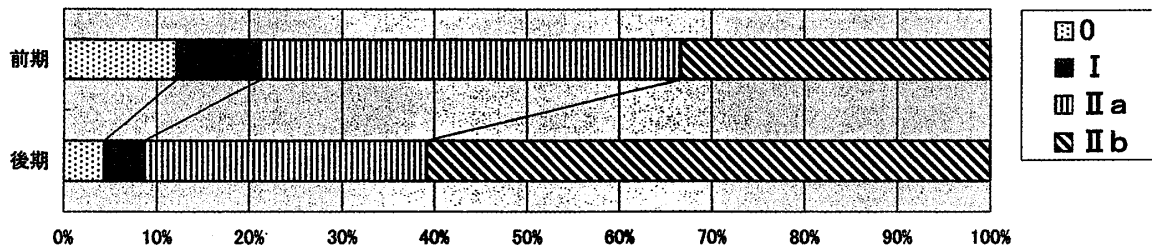


図1 相互水準の割合変化

を持ち、開始を増やしたと考えられるとともに、本児は前期から反応性が高かったことを示している。大人のかかわりに対して見る・受け取るなどの反応が前期から見られ短パターンでの成立が見られたことが影響していると思われる。

一方、大人は前期・後期とも全てが伝達行動である。前期は開始50%、反応が50%であったのに対して、後期は開始が20%、反応が80%で、開始の割合がかなり減少している。このことから、本児からの開始を待って反応した結果であると考えられる。

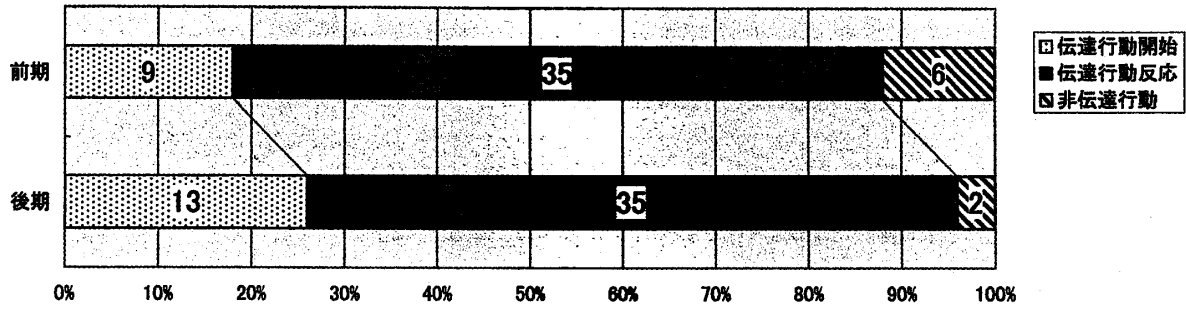


図2 子どもの伝達行動と非伝達行動の割合 (数字は回数)

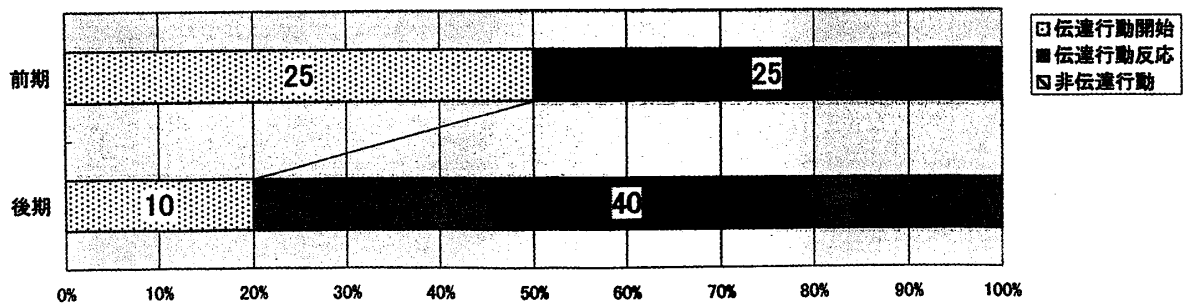


図3 大人の伝達行動と非伝達行動の割合 (数字は回数)

## 2 子どもの伝達行動の変化

子どもの伝達行動を、発声 (V)、行為 (N)、発声と行為を合わせた行動 (V + N) の3つに分け、それぞれの割合の変化を見た (図4)。

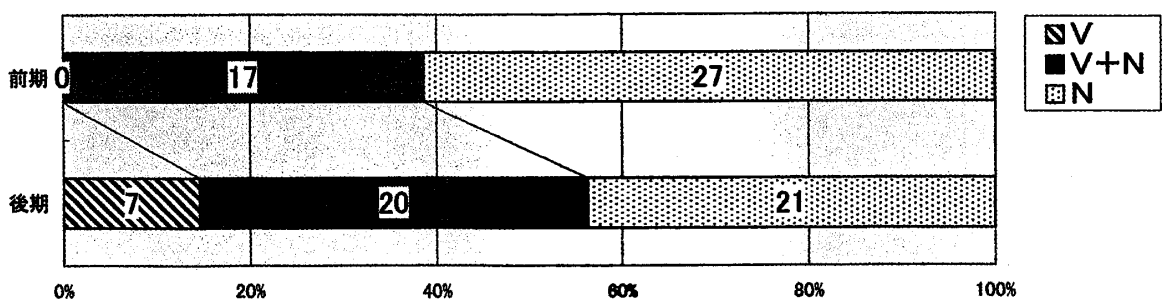


図4 伝達手段の変化 (数字は回数)

前期では、発声のみや発声を伴った行為は39%であったが、後期では57%とかなり増えている。発声が増えたことや発声と行為が複合化された伝達行動が多くなったことで、より伝達意図が明確になって、やり取りが続く要因になったと考えられる。また、その際、前期においては人形やボールなどの物に向けられた発声や行為ばかりであったが、後期においては明らかに大人に向けられた発声や行為だと判断される行動が出現するようになり、「誰に」「何を」伝えたいのかがよ

り明確になってきたと言える。表3に、後期の遊びの中で本児が、伝達手段を複合化して意図を伝えている場面をトランスクリプトで示す。

表3 トランスクリプト・後期「いない いない ばあ遊び」

子ども		大人
37 <u>「うー」と教師の方へ手を伸ばす。</u>	→	37 「あー、今度、先生？」と自分を指さしハンカチを取る。
38 ハンカチの方を見る。	←	38 「じゃー、いくよー」
39 教師を見ている。	→	39 手を振り「バイバイ」
40 「いー」と言い見ている。	←	40 「いないいない・・・」とハンカチをかける。
49 <u>「うーうー」とアンパンマン人形にハンカチをかける。</u>	→	49 「やったー」
50 「うーん」「うん」と見ている。	←	50 「今度はアンパンマン」「いくよ」とハンカチをかける。
51 アンパンマンを見ている。	←	51 「アンパンマンいくよ、1、2の3」とハンカチをかける。

3 ミクロ分析による大人の問題

子どもの伝達行動がより明確になってきたものの、それに対する大人側の読み取りという点においては、後期においても課題が多かった。このことは、表4に示すように、大人が本児の視線や手の動きなど細かなサインを見逃したために、子どもの意図と大人の意図がズレてしまっていることが多かった。大人の文脈で遊びを展開してしまいがちな大人の問題点が指摘された。

また、本児は発達検査においても言語理解は1歳に達しており、対人関係や発語といった領域

表4 トランスクリプト・後期「絵本」

子どもの意図	子ども		大人	大人の意図
	1 ページをめくろうとする。	→	1 ページをめくりながら「パツ」と言う。	
	2 教師の指を触り「うー」と手を元に戻す。	←	2 指さし「えーん えーん お友達のスズちゃん」と文を読む。	
	3 「うーうーん」と言いながら次をめくる。	→	3 「泣いてるよ」と言い、泣くまねをする。	
スズちゃんいたよ	4 <u>スズちゃんを指さしたたく。</u>	←	4 「パツ」と言う。	
次は何か	5 見ながら次のページをめくる。	←	5 指さして「なかよし いいな いいなあ」と言う。	ピヨちゃんとスズちゃんなかよしだね <意図のズレ>
ピヨちゃんだ	6 <u>ピヨちゃんを見ながら本を触る。</u>	→	6 指さして「あつ ちょうちょうさん」と言う。	ちょうちょうだよ <意図のズレ>
ピヨちゃんだよ	7 <u>ピヨちゃんに指さしの手を動かす</u>	←	7 指さし「Y君 ちょうちょうさんだよ」と言う。	ちょうちょうだよ <意図のズレ>
	8 口を動かし教師を見て何か言う。	←	8 「ひらひら・・・」と読み手手を横に動かす。	絵本の文を読もう <意図のズレ>

よりも高い結果を示しているように、人とやり取りする力より認知面においては高い能力を有していると考えられた。その点を考慮して、絵本での遊びの中で見られた本児の命名要求に応えるかわりなど、もっと本児に相応した遊びの内容や展開を工夫することが必要であった。

(文責：上国料 里美)

#### 4 遊びの変化

療育前期（3歳）は、手をひらひらさせたり絵本をたたく等の感覚運動的な一人遊びが多かった。また、大人に向けてボールをころがすことも少なかった。Y児からの働きかけも稀であった。療育中期（4歳）では、トランポリンや揺さぶり遊びを契機にして、大人に対する要求行動や期待反応が見られるようになった。特に、絵本を媒介としたやり取りを好み、大人の手をつかむなどのクレーン現象や指立て（poking）が多く見られた。療育後期（5歳）では、遊びにおける三項関係やボディ・イメージが豊かになってきた。また、大人への要求行動としての手を差し出す行為と発声という複合的な発信行動が増加してきた。この間における主な変化としては、①物を他者に手渡すという三項関係の形成が見られるようになったこと、②人に対するコミュニケーション意欲が増した（ミニカーだけが置かれた状態では動かなかったが、ミニカーの側に大人がいると、2～3m離れていても寄ってきた）こと、③大人へ手を差し出して遊びを要求する行為が出現したこと等である。特に、②のエピソードは、対人系の認知発達を土台として対物系とのつながりができるという三項関係の世界が豊かになった結果、Y児の遊びも能動的になったと考えられる。「いないいないばあ」遊びを楽しむようになったが、この遊びは物の永続性という認知発達を背景に持ちながらも、子どもと大人との信頼関係に基づく期待感が最も重要であると伊藤（1998）は指摘している。さらに、伊藤（1998）は期待感を生じさせる遊びとして、情動的交流遊びが有効であると指摘しているが、Y児に対してもくすぐり遊びや揺さぶり遊びなど、子どもと大人の間で情動の共有が可能な遊びを導入したことが、三項関係の成立や遊びの発達を促進させたと考える。

#### 5 コミュニケーション行動の変化

3歳時のコミュニケーション行動として、①ハア／ハア／ハアと声を出して笑う、②絵本の中の対象をつつく（指立て）、③大人の髪を引っ張る、④アイコンタクト、⑤身振りサイン、⑥クレーン現象などが見られた。従来、笑いは情動表出反応としての非言語的行動として位置づけられてきたが、子音と母音を含む反復音節の出現という見方をすれば、音声言語の一種ということになる（正高，2001）。また、絵本の中のネコやイヌに注目しての指立ては発語の基礎構造が含まれた行動である。さらに、大人の髪を引っ張る行為を「問題行動」視するよりも、他者に自己の要求を伝達する手段が未熟なために生じた要求行動という理解が大切である。

4歳時のコミュニケーション行動として、①母親の手を引く（誘い出し行動）、②外出時に靴

やカバンを提示する, ③空腹時に菓子袋を持ってくる, ④ポーンと言いながらボールを大人に向かって投げる, ⑤「いないいないばあー」遊びの中で, 「ばあー」らしき自発的な発声が見られる, ⑥リーチング行動などが見られた。この種の誘い出し行動や提示行動, また信号として物を提示する要求行動は, 象徴的行為の前段階の言語行動である。特に, ②の提示行動は有意味言語獲得の初期段階である動作概念の成立を示唆する行動である。さらに, ④の行動は, ボールという概念的理解の成立以前に, この種の身体動作・身振りを伴いながらボールという対象を認識するプロセスが存在することを物語るエピソードである。

5歳時のコミュニケーション行動として, ①大人の指をつかみ, ブランコ乗りを要求する, ②ブブーと言うと, 語尾を模倣する, ③譜面台に顔を自ら隠して, 「いないいないばあー」遊びをする, ④ハンドルと言うとハンドルに触る, ⑤「イヤ/イヤ/イヤ」と発する, ⑥指を歯ブラシに見立てる, ⑦発声を伴う身振りサイン等の行動が見られた。語尾の模倣は聴覚受容の発達を示唆する行動である。また, 見立て遊びは抽象的・想像的思考の重要な基礎となる。さらに, 子どもは, 「いないいないばあ」遊びをしながら, 人間の会話の交替パターンを練習し, 遊びの中の対話的構造を内化し始めるのである (Ratner & Bruner, 1978)。併せて, ⑦の発声を伴う複合的行動によって, Y児が志向した世界や対象物に大人が注意を向ける, いわゆる「注意の共有」が成立し, 事物を媒介とした言語獲得の基盤と言われる三項関係の世界が一層, 促進される結果となった。

3年間におけるコミュニケーションの発達的变化として, ①子ども主導の相互作用の成立, ②物を介して人と, 人を介して物とかかわるといふ三項関係の形成, ③学習の基礎である模倣の出現, ④言語の基礎である間接化事態での遊びの成立, ⑤事物の機能性を理解した動作概念の獲得などが見られた。

#### IV まとめ

本事例を通して, 大人が子どもの意図を読み取って反応的にかかわることで, 子どものコミュニケーション意欲や能力が引き出され, 子どものかかわりの開始が増え, 伝達行動に変化が見られた。そして, やり取りを楽しみ, 長く続くようになった。また, ビデオによる記録をマクロ分析とミクロ分析を行うことによって大人と子どもの課題が明確になり, 大人のコミュニケーション感度を向上させる手がかりとなった。

さらに, 3年間の療育において, Y児が動作概念や理解言語を獲得した背景として, ①情動的交流遊びの導入により対人認知が促進され, 言語の基礎である三項関係が成立したこと, ②Y児の偶発的な行動を大人が自発行動として受信しフィードバックしてあげた結果, 意図的な発信行動が増加したこと, ③遊びに見られた前言語的行動や認知行動を感度良く意味づけしアプローチしたこ



とにより、言語的行動が出現するようになったこと、等が考えられる。

(文責：内田 芳夫)

### 引用文献

- 1) 伊藤 良子：障害児と健常児における遊びとコミュニケーションの発達，風間書房，1998.
- 2) 正高 信男：子どもはことばをからだで覚える，中央公論新社，2001.
- 3) Ratner,N.,&J.S.Bruner.: Social exchange and the acquisition of language. *Journal of Child Language*. 5, 391-402, 1978.
- 4) 竹田 契一・里見 恵子：インリアル・アプローチ，日本文化科学社，1994.  
\*なお，日本 INREAL 研究会編集の INREAL 研究 (No12, 2002) を参考にした。